

【論考】

秀吉の生誕と幼少期の追検証

奥田 尚

はじめに

秀吉については、わからないことが多い。少し気になる所があり、秀吉の伝記を調べていたのだが、秀吉の姿は容易に浮かび上がらない。本稿では、秀吉の誕生と幼少期について、各種の伝記を追検証し、当該時期の秀吉の姿を検討してみたい。追検証により、秀吉の伝記の時代的特質が、ある程度はつかめるのではないかというのが、本論文の副次目標である。

秀吉の伝記についての研究は、桑田忠親氏の『豊太閤の伝記物語の研究』（一九四〇年五月・中文館書店）が定評のあるものである。この本は『太閤記の研究』（一九六五年二月・徳間書店）の「あとがき」によれば、一九四〇

年に八五〇部だけ出版され、市中にほとんど出回らなかった。そこで、同書を徹底して改定した本として今回出版した、とある。秀吉の伝記の研究については、これ以上の著書はない。本稿もこの著書に依拠するところが多く、その場合には、なるべく「桑田氏によると」と注記したもの、一々断るのが文章上煩雑な際には省略した場合も多い。

一 秀吉の伝記

秀吉に関する基本的な伝記は、小瀬甫庵（おぜ ほうあん）（永祿七）年生・一六四〇（寛政一七）年ころ没）の『太閤記』（以下、『甫庵太閤記』と記す）とされ、その自序の年次は一六二五（寛永二）年一月であり、そのころの完成である。甫庵は江戸時代の初めに、織田信長とか秀吉とかの伝記を手掛けた人物で、儒学にも医学にも通じていた。甫庵の書いた信長の伝記の『信長記』は、誇張が多いといわれ、現在ではほとんど読まれなくなった。信長の伝記なら太田牛一（おたな ういち）（一五二七（大永七）年生・一六一〇（慶長一五）年ころ没）の『信長記（信長公記）』（信長の公的な価値が高いということで、現代の人々はほとんどこれ

を読む。けれども、牛一の『信長公記』は、自筆本あるいは筆写本でしか江戸時代には読めなかったことからわかるように、江戸時代では低い評価しかなかった。版本として流布した甫庵の『信長記』の方が、江戸時代人の好みに合うものであった。「なお、甫庵『信長記』の版本画像と「読み本」は本学図書館から公開してもらったが、アドレスが見つけにくい。そのうちに改善されるだろうが、現時点では「追手門学院大学電子図書館」で検索するとアドレスに到着しやすい。秀吉の伝記の『甫庵太閤記』は、彼の『信長記』よりもさらに虚構や誇張が多いが、秀吉のまとまった伝記として江戸時代には広く流布したし、現在でも参考になれる。

秀吉的部分的な伝記を集めたものに、大村由己^{おおむら ゆきこ}（一五三六（天文七）年ころ生～一五九六（慶長元）年没）の『天正記』^{てんしゅうき}があり、これは天正期（一五七三年～九二年）を中心にした秀吉の伝記になる。『天正記』の現在残されている諸編のうち、最新のものは一五八八（天正一十六）年の「聚楽行幸記」であり、この年以降の成立である。この『天正記』の版本（アジア学科から二〇一二年四月に影印と参考の「翻字編」を出版する予定）の文章は、随所にひどい省略をしたり、間違った要約があるなど、ひどい内

容・文章といわざるをえない。逆にいえば、文章がひどければひどいだけ、想像力を働かせる余地があり、面白いともいえる。幸いなことに由己の原文に近いものが、自筆本や信頼できる写本の形で残っている。それらを活字化して集めたものが、桑田忠親校注『太閤史料集』（一九六五年二月・人物往来社）に収められている「天正記」である。

また、秀吉の伝記には太田牛一の『太閤さま軍記のうち（大かうさまくんきのうち）』という、これも自筆本が現在に伝わっているものがある。この本は慶応大学斯道文庫編『大かうさまくんきのうち』という本として、影印本と翻字篇とセットで一九七五年二月に汲古書院から出版されている。

内容としては、豊臣秀次（秀吉の養子で、秀吉の姉の日秀^{ひしゅう}（トモ、智、瑞龍院ともいう）の子。一五六八（永禄一）年生・九五（文禄四）年秀吉の命令により切腹）が関白となった一五九五（文禄四）年から、秀吉の死去の約五月前に、自身も参加して盛大に行なわれた一五九八（慶長三）年の「醍醐の花見」までを描く。この牛一の『太閤さま軍記のうち』は、版本『天正記』の巻八と巻九にかなりひどく変形が加えられているものの、収められ

ている。『太閤さま軍記のうち』は、桑田氏によると一六〇二（慶長七）年から慶長一〇年の成立である。

さらに、朱子学者の林羅山（一五八三（天正一一）年生・一六五七（明暦三）年没。徳川家康に登用されて、幕府の政治思想の根本をつくった）が書いた『豊臣秀吉譜』という伝記もある。この本は成立のことを記した奥書には、一六四二（寛永一九）年に羅山の子の林春徳が記したとある。桑田氏は、春徳はこの時に一九歳なので、父の羅山の説を筆記したにすぎないとした。この本が羅山の書であることを疑う意見はほとんどない。

内容は『甫庵太閤記』を短くまとめたものといわれ、取り柄がないようにもみえるものの、誕生から死去までを漢文体で客観的に描いたもので、これはこれで十分に読みごたえのあるものである（現在時点で茨城大学図書館からインターネットで版本の画像が公開されている。本学図書館でも一六五八（明暦四年）の版本を所蔵している）。

この本の種本の『甫庵太閤記』の方は、一五九八年三月の醍醐の花見を巻一六に記し、巻一七に九五五年の秀次の切腹にいたる物語を記して、時間の経過を逆転した形で、いわば「秀吉の伝記・本編」に相当する記述を終え

る。残りの巻一八・一九は戦国期の武士たちの伝記集ともいべきもの、巻二〇・二一は甫庵自身の思想を述べる「八物語」、巻二二に豊臣氏関連の断片的な記録を載せる。

つまり、『甫庵太閤記』は、秀吉の死去を描いた部分がなく、秀吉の伝記として名高いものの、死を描いていない点からも、決して客観的な秀吉の年代記ではないことがわかる。自己の歴史観を述べる「八物語」を『太閤記』の末尾に配しており、甫庵は「八物語」の自己の歴史観によって、秀吉の伝記を叙述したのである。ちなみに林羅山の『豊臣秀吉譜』は、秀吉の誕生から臨終まで記述がきちんと整っており、その死去については、朝鮮からの撤兵を命じて瞑目したとする。この点では、『豊臣秀吉譜』は秀吉の生涯を客観的に描こうとしたといえる。

以上のものの外にも、かなりの分量のまとまった秀吉の伝記としては、川角三郎右衛門の『太閤記（川角太閤記）』がある。桑田氏の研究により、筑後柳川藩の初代藩主の田中吉政（田中家は二代で継嗣なく断絶）の家臣の川角三郎右衛門の執筆と推定されている。活字本は前掲の桑田忠親校注『太閤史料集』に「川角太閤記」として収

載されている。

『川角太閤記』は一五八二（天正一〇）年の織田信長が徳川家康を安土でもてなしたことに始まり、巻四の秀吉の死にまつわる種々の記述までが「伝記の本編」で、最終の巻五は秀吉の生前から「関ヶ原合戦」前後にいたる種々の覚え書きになっている。巻四の秀吉の死去の記述は簡単で、「慶長三（一五九八）年八月」十八日、太閤様「他界なされ候事」という記述しかない。わずかこれだけでも、きつちりと秀吉の死を描いていることは、それを記さない『甫庵太閤記』よりは、歴史物語としての構成は整っている。なお、『川角太閤記』の成立は、桑田氏によれば一六二一（元和七）から元和九年という。

『川角太閤記』は、物語のはじまりを、信長が家康を安土でもてなすところに行っている。これはこの接待役を命じられた明智光秀が、用意した生魚なまづかなを腐らせ、信長がそれを激怒したという、本能寺の変の発端を記すところに目的がある。光秀の本能寺襲撃を記し、次いで羽柴秀吉の毛利輝元との和睦、いわゆる中国大返し、山崎合戦での秀吉の勝利と続く。秀吉の天下取りのはじまりから、その死去、その後の覚え書きという、秀吉の半生記の構成になっている。

他には秀吉の軍師竹中半兵衛の三男の重門が書いた『豊鑑とよかがみ』があり、成立は寛永八（一六三一）年八月である。秀吉の生誕、信長に従ったの一五六四（永禄七）年の南近江の箕作城攻撃に手柄を立てたことをはじめ、本能寺の変、中国大返し、賤ヶ岳合戦、小田原合戦、文禄の役など主要業績を略述し、一五九四（文禄三）年ころからの伏見城築城で記事を終える。諸書を対照したようでもあり独自の記述もあるものの、『甫庵太閤記』からの借用もすでに桑田氏に指摘されている。それでも桑田氏は『豊鑑』全体としては、高く評価する。

江戸時代の後半の一七九七（寛政九）年から一八〇二（享和二）年にかけて、七篇八十四巻という大部の『絵本太閤記』がつくられた。竹内確斎のわかりやすい文章に、ところどころに岡田玉山の絵を挿入した体裁である。桑田氏は、大衆向けの読み物としてはもつとも要を得ており、一般の庶民に太閤秀吉に関する歴史的常識をあたえた功があると評する。これを超える一二編三六〇巻という超長編の栗原柳庵『真書太閤記』もあるが、完成は明治になる。

桑田氏によれば『真書太閤記』は、講談用に書かれた『太閤真蹟記』という写本の形で広まった種本があり、

それに柳庵がさまざまな本からの引用を加えて、再整理したものである。柳庵の再整理は極めて幼稚なものであり、また『太閤真蹟記』自身が文芸作品と見ても、文章が冗漫に過ぎ、『絵本太閤記』の簡潔平易な記述にはとうていおよばないと桑田氏はいう。なお、『絵本太閤記』の本文の表と裏の間にある「柱」と呼ばれる折り返しの部分には「真蹟記」とある。筆者の手元には『太閤真蹟記』の写本の一部分があるが、『絵本太閤記』との比較を行ない得ていないが、別の本であろう。

なお、『絵本太閤記』は、完成完結後二年の一八〇四（文化元）年に、「公儀御法度之書」つまり幕府の禁令に触れた本として、絶版、版木と完成した本の没収ならびに売買の厳禁が命じられた。「早稲田大学図書館から『絵本太閤記』の画像はウェブ公開されている。その初編巻一の末尾に、徳川幕府が元版を焼き捨てたとの説明書きがある」。

二 日吉丸の誕生と父母

『甫庵太閤記』の秀吉の誕生は、非常に簡単な記述である。父は尾張国愛智郡中村の住人の筑阿弥で、母親が

太陽（日輪）が懐に入った夢を見て誕生したので、日吉という名にしたとだけを記し、誕生の年さえ記さない。

なお、この誕生事情の説明は、秀吉自身が気に入っているもので、朝鮮使節に宛てても、母が太陽が懐に入るを夢に見て懐妊した「予かつて托胎の時に当たり、慈母、日輪の懐に入るを夢む」（原文は漢文）という内容の国書を出している（『続群書類従』収載『続善隣国宝記』所収「天正十八（二五九〇）年豊臣秀吉書契案」）。

普通の伝記であれば主人公の誕生年月日は記されるべきであろうが、『甫庵太閤記』には、その記述がない。

『太閤素生記』（成立については後述）は、一五三六（天文五）年元旦とする。『祖父物語』（清須の朝日村の柿屋喜左衛門という詳細不明の人の著述で、一六四二（寛永一九）年ころの成立で、間違いもあるが、独自記事も多いと桑田氏はいう）では「申ノ年六月十五日」とし、この前後の「申ノ年」は一五三六（天文五）年の「丙申」になる。

『天正記』のうちの『関白任官記』では、丁酉年二月六日の誕生とし、丁酉年は天文五年丙申の翌年の六年の丁酉がそれにあたる。「申ノ年」は秀吉の『甫庵太閤記』などの秀吉の面構えは「猿」に似ているという、よく知られた「猿」伝説から選ばれた誕生年なのであろう。

なお、伝記以外では、『岐阜県史』史料編古代中世一の八二三頁の「伊藤秀盛願文写」に「関白様 西之御年 御年五十四歳」を信頼できるもののように扱うが、「コノ文書、ナホ研究ノ余地アリト雖モ、参考ノタメココニ掲グ」とあるように、問題がある史料とみられる。伝記についての種々の記述からすれば、秀吉の誕生年次は未詳とすべきであろう。

特別な人物には特別な出生があると考えるのは、ある意味では自然なことであろう。松永貞徳（一五七一（元龜二）年生・一六五四（承応三）年没）という、秀吉より若い秀吉の晩年を知っている著名な俳諧師がいる。その貞徳が、秀吉は後奈良天皇（一四九六（明応五）年生・一五五七（弘治三）年没、在位は一五二六―五七年）の「御落胤（ごらくいん）〔血統につながる人〕」だと秀吉が話したと記している。貞徳はこの話を否定的には書いていないので、御落胤説があるいは信じているのかもしれない。秀吉の発言の部分は次のようになっていいる。

但わが母わかき時、内裏のみづし所（御厨子所・宮中）の食事などを調える役所」の下女たりしが、ゆくりかに「思いがけず」玉体（天皇の体）にちかづき奉りし事あり。そのよ「夜」の夢に、いく千万のお

はらひ箱（御はらい）〔通常は「神のお札（ふだ）」をいうが、お祓（はらい）の用具の「御幣（ごへい）」と見てもよい〕を収めた箱」、伊勢（伊勢）より播磨をさして、すき間もなく天上をとび行。又「ちはやぶる神のみてぐら（御幣）てにとりて〔手に取りて〕」と云（い）御夢想を感じて、われを懐胎しぬ。

（『載恩記』より。「」は私注）

わかりにくい文章であるが、秀吉の母は宮中に下女として仕えたことがあり、後奈良天皇に近づいて、その夜に御幣を収めた箱がびつしりと伊勢から播磨へ飛び行く夢を見た（伊勢は伊勢神宮で「御はらい」の縁語とすれば、播磨は本能寺の変や山崎合戦の時の秀吉の居城姫路の所在国である）。一方、後奈良天皇は神にささげる御幣を手を持つ夢を見、天皇がそうした夢を見たことを秀吉の母は感じて、秀吉を身こもった、というのである。「夢」の対応を通じて、天皇の体を感じて秀吉を懐胎した、つまり秀吉は後奈良天皇の御落胤だといった、ということになる。

下剋上の戦国時代の雰囲気の中で、下層ののし上がり、上層の没落は日常のことで、誰の血統なのかを気にしなかった。天皇の血筋といっても、血統しかがるものがない一部の上層の人々を除けば、特別な意味はなかった。秀吉の母は「なか」という名というが、「なか」は一般的

な名である。むしろ『甫庵太閤記』などが秀吉の出生地とする愛智郡中村の「中」自身が、母の名にちなむ後代の命名かもしれないし、逆かもしれない。秀吉の出生地は、『祖父物語』では「清須の水野」の生れとする。

母の生年は一五一三（永正一〇）年ころで、『太閤素生記』（桑田氏によれば、甲斐武田の旧臣の土屋田都^{えんいち}の養子の知貞（一五九四（文禄三）年生・一六七六（延宝四）年没）が聞き書きをまとめたもので、知貞は家康に仕えた）によると尾張国の「ゴキソ村」に生れた。ゴキソは「御器所」をあてるのが一般的で、木器の製作所と考えられる。

木器をつくる本地師は、「山の民」の性格が強く、普通の農民ではない。材木を取るために山中を渡り歩くので、田地の耕作はせず、税も負担しない「自由民」の性格を残す存在である。こうした一所に定住しない人々は、農民からすれば得体のしれない者として、差別の対象となる。逆にそうした差別感覚は、賤民視とともに、崇拜すべき高貴な存在の特別視にもつながり、一般的存在とは離れた存在として「聖」賤視を生みだす。

『天正記』の中の『関白任官記』には、秀吉の祖父母、つまり秀吉の母の父母を朝廷に宮仕えした人で、父を

「萩中納言」（實在しない人名）とする。秀吉の母が三歳のころに、父の萩中納言は無実の罪を着せられて尾張国飛保村雲に流された。秀吉の母は幼年にもかかわらず上京して、御所の傍で宮仕えし、二、三年後に戻ってきて生れたのが秀吉であるという物語を記す。賤民視が逆転した高貴視の例と見ることができるといえる。

村雨は秀吉の姉で、秀吉に切腹させられた秀次の母でもある「トモ（智）」にまつわる地名で、「トモ」は出家して日秀と名のる。日秀は京都嵯峨野村雨に、瑞龍寺を開き、息子の秀次らの菩提をとむらった。このために「瑞龍院」とも呼ばれる。そうすれば「飛保^{ひほ}」とあるのは、「悲しみの母（悲母・ヒボ）」からの連想によるものかもしれない。

竹中半兵衛の子の重門が書いた『豊鑑^{とよかがみ}』では、秀吉は天文六（一五三七）年の生れで、熱田神宮の東北五、六キロの愛智郡中村とかという、萱葺^{かやぶ}き屋根の家五、六十軒ほどの村の、粗末な貧しい家の子なので、父母の名前もわからないし、一族などもあつてないようなものだったとある。次掲の史料がそれで、おそらく実際に近い記述であろう。

羽柴筑前守豊臣秀吉。天文六年丁酉（一五三七年）

に生れ、のちには関白になり昇給ふは、尾張国愛智郡中村とかやとて、あつ田の宮〔熱田神宮〕よりは五十町計乾〔北西の方角〕にて、萱ぶきの民の屋わづか五六十ばかりやあらん。郷のあやしの民の子なれば、父母のなも「名も」たれかはしらむ。一族などもしかなり。二八計の年〔二六歳前後〕、只ひとり遠江の国までさそらへ「さすらい」の意〕行て、松下氏石見守とかやにつかへて、しばらくありしが、思定おもひだまざるにや、又もとの里にかへりぬ。其比尾張そのころ国の司は織田上総守平信長主なり。いかにもして宮仕みやつかへ「仕官」の意〕ばやと思はれしかど、かくいふべくたづき「手段」の意〕も更になかりければ、いかがはせんと念じ給へりし。信長、川道遥「川遊び」の意〕して帰り給ふ道の辺ちかくゐて、宮仕の望あんなると高く宣給のたまへば、我につかへんや、いかさま思ふ所もありなんとゆるし給へば、やがて清洲に供奉して朝夕宮仕せり。

『群書類従』二〇輯卷三七九『豊鑑』五一七頁

父親もわからないような子で、母も名もわからぬ存在で、素性不明の「あやしの子〔不審な子〕」として生まれたという。父母の名もわからないと書きながら、誕生年

だけは記す『豊鑑』の誕生年の記述を、どこまで信じられるであろうか。

『大閣素生記』には、母は尾張国のゴキソ村に生れて、近傍の中中村（上・中・下の中村があつたとする）の住人の木下弥右衛門と結婚し、秀吉の姉の瑞龍院（トモ・智）と秀吉を生んだ。弥右衛門は織田信秀（信長の父）の鉄炮足軽であつたものの、手負い傷を受けて中村にて百姓になった。鉄炮の伝来は一五四三（天文一二）年のことであり、秀吉の誕生以前に「鉄炮足軽」は存在しないので、『素生記』の記述は誤っている。

『素生記』では、秀吉八歳の時に父の弥右衛門は死去、その後に母は再婚する。その再婚相手は織田信秀の「同朋」の竹阿弥といった。同朋は権力者の側近に侍り雑用をする人の総称で、僧の姿をするのが普通で、俗世間の人間ではない、つまり普通人ではない扱いをされた。人であつて人ではない、つまり差別を受ける身分の者も混在した。よく知られた例では、銀閣寺の庭をつくったことで有名な善阿弥は、被差別階層の出身で、室町八代將軍の足利義政に重用された同朋である。『素生記』には秀吉の継父の竹阿弥は、病気で中村に退き、再婚後三年にして死去したとある。

『素生記』は秀吉の出生や父の話を記した後に、「中々村の代官稲熊助右衛門と云者、信長公の弓を預る。彼娘、秀吉前後の年比なり。其娘、予が養母なり。常に是を物語す」とある。確実な典拠のように見えるが、稲熊助右衛門という人物の存否は確認できないし、自分の養母でありながら名を明示せず「娘」としか記さないところからすれば、確かな典拠と見なしうるかどうか疑問である。この『素生記』はどこどこに『甫庵太閤記』を用いていることなどもあり、桑田氏はこの史料は聞き書きではあるが、その場で書きとめたものではなく、後にまとめて記憶によって書いたもので、あまり高く評価できないと述べている。従うべき意見である。

林羅山の『豊臣秀吉譜』は、冒頭に秀吉の系図を記し、秀吉に「不詳其父（その父は詳らかならず）」とする。本文には、生れたところはわからないが、あるいは愛智郡中村郷の竹阿弥の子ともいう、と記す。すでに見た『豊鑑』の父母の名前もわからない「あやしの子」とあることや、この「不詳其父」の記述が正しい。農民以外の貧しい階層に属した女性には、身につけた芸とともに性を売ることも生きるためなので、そうした女性の生んだ子供も多かったにちがいない。源義経の母の常盤も、清水寺

に属した芸人集団の一員だったとされ、高級か貧困かの差はあれ、同じような事情が想像でき、清盛との間にも娘があった。

三 『絵本太閤記』にみる秀吉の誕生

幕末以降、すでに触れたように、庶民的な太閤秀吉像をつくったとされる『絵本太閤記』の秀吉の誕生から幼少期を見よう。

比叡山の西塔の僧に「昌盛法師」という人物があった。戦国乱世のままで天下の人々がすべて修羅道に落ちると考え、天下泰平になるように祈願をして、琵琶湖に浮かぶ竹生島（弁財天あるいは観音信仰が主の島）に百日の期限を決めて籠った。期限の満了する百日目の夜明けに異様な神女が現れて、お前の家に一人の不思議な子をさずけるので、僧をやめて子の生れるのを待てと告げた。絵では龍の冠をかぶったお姫さまが描かれており、弁財天に多い華やかな服装に描かれている。弁財天の起源はインドの川の神とされるので、水神の龍のついた冠が描かれたのであろう。

昌盛は僧をやめて琵琶湖の東岸の浅井郡（現在の長浜

市一帯で妻をめとり、田を耕して生活していた。「事があつて」としか書かれておらず、事情はわからないが、昌盛とその妻は尾張国愛智郡中村に移り、地名により中村弥助昌盛と名のつた。昌盛の妻は妊娠し、昌盛はこの子か、あるいは孫が、きつと天下を泰平にしてくれにちがいないと喜んだ。その子を弥右衛門昌高といい、昌高はまた弥助昌吉という子（昌盛の孫）を生んだ。

この孫の昌吉は武を好んで農を嫌い、清須の城主小田備後守（小田）は「織田」の当て字であり、また、織田備後守信秀は清須城主になったことはなく史実と異なる）に足輕として仕えた。信秀と今川義元の合戦の時に目覚ましい活躍をしたものの、膝に深い傷を受け、歩行も自由にならなくなつて故郷の中村にもどり、頭を剃つて「筑阿弥」と名のつた。妻は持萩中納言保廉の娘であつた。

保廉卿は無実の罪で尾張に流され（無実であろがなからうが罪人は差別の対象であつた、獵師（殺生をする仕事なので被差別階層の一つ）の治太夫の娘との間に女の子をもうけた。ほどなく罪をゆるされて京都にもどり、その母と娘を引き取る約束であつたが、約束を果たす前に死去した。母はこうして日陰の身になつてしまったので、父の治太夫のもとにもどり、娘はそこで生長し、弥助昌吉

の妻となつた。

昌吉の妻は、日吉権現に男子を産みたいと祈願していた。その靈験があつたのであろうか、ある夜、太陽が懷に入つた夢を見て妊娠した。出産するまでに十三月かかり、天文丙申（一五三六（天文五）年）の元旦の寅の刻（午前四時過ぎ）に男子を出産した。その時、家の上に靈星が出現し、昼間のように明るく家を照らした。この星は生長の後も、困難な戦いなどの場合には常にあらわれて、凶を吉に変えた。また、この子は生れた時にはすでに歯が生えそろつていた。顔が猿に似ていたので、日吉丸と名付けたけれど、その名ではなく猿之助と呼ばれていた。

四 『甫庵太閤記』の秀吉の幼少期

『甫庵太閤記』では、秀吉は生まれながらに「利根聡明」だったので、八歳のころに尾張国（愛知県）の光明寺という寺に小僧として入れられたが、僧尼は物乞いと同じ仕事だといって、寺のいいつけに従わなかつた。寺も困つて、秀吉を寺から家に戻そうとすると、非常に嫌がつて、寺を焼き打ちにし、坊主を皆殺しにするとおど

した。しかたなく寺は、秀吉にさまざまな物を与え、機嫌を取って寺から出て行ってもらった。

金光明最勝王經という経典があるように、光明は宗派にかかわらずなく、仏教と密接な関係を持つ。光明は仏の教えが光のように四方八方を照らすというイメージで、仏を描いた絵などに仏から放射状に広がる光を描くものがあるが、その光にあたる。その光明を寺号とする寺は、特定できるような存在ではない。

要するに当時一般的に、賢い農民の子は寺の僧とし、その小僧にした仏縁にすがって助けられようとした。そうしたこととを投影して、物語としたに過ぎない。寺を出された後の物語はなく、もともと家が貧しかったので、一〇歳のころから人に雇われ、手間賃をかせぐために方々を流転したとする。八歳で寺へ、一〇歳で方々を流転というのも、具体的な歳をいつているのではない。次に二〇歳のころにとあるところから見て、切りの良い数を並べたに過ぎない。

二〇歳のころに遠江国（静岡県、当時は今川義元の領地）の住人の松下加兵衛に仕えていたが、ある時、加兵衛が尾張の信長の家中では、どのような鎧が使われているかと尋ね、秀吉は今川勢が使っている「桶皮胴」ではなく、

「胴丸」という右の脇で合わせることで伸び縮みできるものだと答えた。この問答自体が不合理なもので、信長がどのような鎧を使っているかを秀吉が知っているはずがない。もし、単なる尾張の農民の子に過ぎない秀吉が知っているのであれば、隣国の武士身分の松下加兵衛が知らないはずはない。いずれにせよ架空の物語である。

加兵衛は秀吉に金五、六両を渡して、胴丸を買ってくらうように命じた。秀吉は道中で、この金で出世するための支度をしようと考えた。織田信長を主人にしようとし、心し、刀や脇差、衣服を買って調え、信長に直訴の準備をした。

以上の『甫庵太閤記』が描く秀吉と松下加兵衛との出会いを、信じられないと『太閤素生記』という。秀吉は生まれつき律儀で、黄金五両を信長へ会うために尾張へ行く費用に流用するような人物ではない（このように秀吉を高く評価していることは、『太閤信仰』のようなものが誕生した後の話で、『素生記』の記述の典拠を疑わせる）。『素生記』はまた、加兵衛が若い秀吉に黄金五両を渡すはずはないし、まだ子どもの秀吉に胴丸を買ってこいなどと命じる筈もないとも記す。

五 『素生記』の松下加兵衛との物語

『素生記』には次のようにある。秀吉が一六歳になった天文二〇（一五五二）年春に、父が遺産として残した永楽銭一貫文から抜き取った少額の銭を持つて清須へ行き、木綿布をぬう比較的大きな針を買って、その針を食べ物に代えたり、草鞋に代えたりして浜松の町はずれの曳馬川ひくまがわのあたりに着いた。そのころには秀吉の白い木綿の服は、すっかり垢にまみれていた。この話はすぐ後に分析する。

そのころの浜松城を預かっていたのは飯尾豊前という今川氏の家臣で、近くの大能城を預かっていたのはやはり今川の家臣の松下加兵衛であった。加兵衛は居城の大能城から飯尾豊前の浜松城へ出かける途中に、猿かと思えば人のような、人かと思えば猿のような異形いぎようなものに出会った。加兵衛が家臣にどこの国の何者かと尋ねさせるところ、猿は尾張国から奉公先を探してここまで来たと答えた。加兵衛は自分に仕えるかと問わせると、奉公すると答えたので、浜松城まで連れて行った。飯尾豊前やその子どもたち、家臣などにも見せて笑い物にした上

で、皮のままの栗を与えたところ、口で皮をむく様子はまるで猿そのものだ。家臣のところをあちらこちらと見世物にし、連れまわしたところ、家臣たちは可愛がつて絹や紬つむぎの着物を与えた。水浴びをさせて、家臣たちに貰った衣装を着せると、清々しい立派な姿に変した。

それで加兵衛は草履取りの仕事をあたえると立派にやり遂げたので、手元において雑用に使うことにした。何をやらせても、一つとして加兵衛の心に添わないようなことはなく、次第に物や金の出し入れにも使うようになった。次第に加兵衛が秀吉を重用するのを見て、他の小姓たちは秀吉をねたんで、刀の筭こうがいという部品がなくなると猿（秀吉）が盗んだとうわさし、小刀がなくなると猿のせいだと口々にいい、そのほか印籠や財布、はては鼻紙までもなくなると猿が盗んだというようになった。加兵衛は慈悲心を持つ人物だったので、遠いところから来た行くあてもない身の上だから、このように疑いを掛けられるのだと不憫に思った。そこで、秀吉にいろいろという聞かせて、尾張に帰るのが一番いいとして、永楽銭三〇正を与えて大能を出て清須に向かわせた。

さて、上の加兵衛の物語であるが、どうもあやしい。

どこがあやしいか。まず、秀吉が中村を出て清須へ向かうところがあやしい。まだこの段階では清須城は信長の拠点ではないものの、『素生記』は秀吉の父も、母の再婚後の継父も、信長の父の信秀につかえたとする。

尾張は八郡からなるが、これは上の四郡と下の四郡に分かれており、上の四郡は名古屋の西北西約一〇キロの岩倉城に、守護代の織田伊勢守家があつて支配をしていた。下の四郡は名古屋の西北約七キロの清須城に、やはり守護代の織田大和守家があつて支配をしていた。もともと守護の斯波家の内部分裂に應じて、守護代も二つに分裂したのであり、伊勢守家の方が本家筋にあたるが、大和守家の清須城の方が守護を抱えていた。その大和守家の家老職に三家があり、織田因幡守家、織田藤左衛門家、織田彈正忠家といった。信秀・信長父子は彈正忠家（信秀は備後守を名のつたので織田備後守家ともいう）にあたる。

秀吉は名古屋のすぐ西の中村を出て、西北の清須の城下に入った。上記のように清須には守護家、守護代家、守護代家老の三家があり、素直に考えれば、清須で仕えるべき主人を求めることになるはずである。ところが、清須の城下では木綿針を仕入れるだけで、それを売らな

がら、三河を越えてその東の遠江浜松へ行く。その部分は次のように記されている。

清須を^{いそ}行、下々の木綿ぬのこ「木綿布」と同じ意味）をぬふ（縫ふ）大きな針を調へ「買つて」という意味）、懐に入^{いれ}、先^{なるみ}、鳴海（尾張と三河の境界の近くの地名）迄来て此針を与^{あた}へて食に^{かへ}代る。又、針を以^{もつ}て草鞋^{わらじ}に代る。如此、針を路次^{このはり}の便^{あたへ}となして、遠州浜松^{いふあたり}に来らる。浜松の町はづれ、牽馬^{ひくま}の川（曳馬川）と云^{いふ}辺に、白き木綿の垢^{あか}つきたるを著^きて立廻^{たちまわ}らる。「原文の片仮名を平仮名に代えた」。

「下々の木綿ぬのこをぬふ」とあるのは、読者を想定して、その読者に向けて「下々が」といつているとしても、「此針を与て」というのは、秀吉の行為であるから、秀吉を一段高い地位としている。「浜松に来らる」、「立廻らる」も敬語表現であり、物語自体が秀吉＝偉人を前提にして成立している。

また、確かに『素生記』には秀吉の家が貧しかったとは一言も書かれていない。だからといって白い木綿の服を身にまとえるほど、裕福だったのであらうか。江戸初期でさえ木綿はまだまだ高級な衣服素材で、例えば木綿でも、庶民なら着古しのぼろぼろになった布片をつなぎ合

わせたようなものでも、上等な衣服であった。頭の中の観念で、染めた布は高いから、白い布と考え、木綿は三河の特産品だから木綿と考えたにすぎない。針をわざわざ木綿針と断るあたりに、木綿が質素な衣服になった後世の作文とみられる。

そう思つて読むと、広域地名の曳馬（引間）と小地域の地名浜松についても、疑問が感じられる。浜松城は徳川（松平）家康が引間城を取りこんでつくつたものといわれ、浜松城の名は家康とともに有名になった。そうすれば浜松の近所の久能という加兵衛の城もあやしく、駿河、家康、浜松、駿府、久能山というような連想から使われた地名とも思える。

『素生記』では加兵衛は秀吉を連れ帰り、草履取りなどをさせる。加兵衛と秀吉の話が一段落して、秀吉が信長に仕えることになるが、同じ『素生記』には秀吉は信長の草履取りから仕えはじめたとする。厳密に言えば加兵衛の場合は「草履取りなど一所に置く（草履取りなどと一緒に住ませた）」であるが、内容上は草履取りなどとして仕えさせたことになる。草履取りから仕えはじめるという同じテーマの話が同一の物語に、加兵衛と信長とに二度出てくる。こうした場合には一方が原型、他方が

虚構ということが多い。

草履取りは、履物をそろえるだけだから、あつてもなくてもよい仕事という意味があるとすれば、誰にでもできるもつとも簡単な仕事ということで、一般的に奉公は草履取りからはじまるという観念があつたのかもしれない。そうだとすれば、もつと数多くの物語に草履取りが登場するはずで、たとえば『甫庵太閤記』にもあつてもよい。ところが同書には加兵衛に仕えるところにも、信長に仕えるところにも「草履取り」のことは出てこない。

秀吉が信長の「草履取り」となったという話では、信長の草履を寒い時期には秀吉が懷に入れて温めたというものが有名である。この物語は、一七九七（寛政九）年八月に出版された『絵本太閤記』初篇卷二にある。加兵衛と信長の二度にわたる秀吉の草履取りが『素生記』に出てくることは、何かしら有名な草履取りの物語が念頭にあつたための重複である。もしかすれば、『素生記』の成立は『絵本太閤記』よりも遅れる可能性があるのではないか。もつと厳密に『素生記』の史料としての価値を疑つてみる必要があろう。

『素生記』には先にあげたように、加兵衛に仕えた秀吉は、刀の筭（うがひ）という部品がなくなると猿（秀吉）が盗ん

だとうわさし、小刀がなくなると猿のせいだと口々にいい、そのほか印籠や財布、はては鼻紙までもなくなると猿が盗んだというようになったとあった。『甫庵太閤記』には、秀吉が大刀の付属品の筭（こうがい）を盗んだのではないかと疑われ、自から盗人を捕まえて疑いを晴らしたという物語がある。加兵衛に仕えた秀吉の話はこの拡大版にすぎないといえ、やはり『素生記』の価値が疑われる。

『素生記』については、桑田氏は比較的史料の価値の高いものとされるが、このような点からすれば、さらに疑う必要があるのではなからうか。

六 『繪本太閤記』の秀吉幼少期と松下加兵衛との物語

桑田氏によって、庶民の秀吉像の形成に力があつたという『繪本太閤記』であるが、秀吉の生誕についてはすでにみた。幼少期から加兵衛に出会い、加兵衛のもとを離れるまでを見ておこう。秀吉は八歳で光明寺に預けられたが、手習いなどはせず、近くの子どもを集めて、自分は大将となって戦争ごっこに夢中であつた。寺を追い出そうとすると大暴れをして抵抗したが、とうとう親も

とへ帰された。

もともと貧しい家だったので、母の従弟（いとこ）の清須の源左衛門という商人に奉公先を見つけてもらったが、どの奉公先も長くて半年、短いとひと月、ふた月で追い出されてしまう。遠江（静岡県）、参河（愛知県東部）、尾張（愛知県西部）、美濃（岐阜県）など各地で、こうしたことがあり、三八軒にも及んだ。尾張国長松の陶器屋でも、ひと月ばかりは茶碗などをつくる作業に打ち込み、先輩や店の主人にかわいがられるが、すぐに怠けるようになった。ある時、三歳の子の子守りを命じられると、井戸杵にその子を縛り付けて、三河国へ向かって逃げてしまった。

尾張国の清須あたり一帯から近国にかけての野武士の千人ほどもなる集団の頭は、清須付近に住む蜂須賀小六（ちちむす）といつた。大勢の手下（てした）を引き連れて尾張の東にある岡崎橋を渡った。日吉丸（秀吉）がこの橋の上で寝ていたのを、思わず知らず小六は頭を蹴飛ばして、行き過ぎようとした。日吉丸は激怒して小六に喰（く）つてかかり、その不敵さから小六は日吉丸を手下の一人に加えた。

小六は、盗みに入るさいの秀吉の働き、捕まりそうになった時の機転などに注目した。小六は自分の刀を三日以内に盗むことができれば、秀吉に与えると約束した。

秀吉は小六に一睡も出来ないようにした上で、最後の夜の明け方に少し油断した隙に刀を盗み取る、その秀吉のやり方にも感心した。一年ほどを小六のもとで過ごした秀吉は、母の従弟で秀吉の奉公先の世話をしてくれた清須の源左衛門に偶然出会った。秀吉が小六のところにいると伝えると、源左衛門は小六は強盗の張本人だからと反対し、しばらく自分の家に引き取った。

しばらくして源左衛門は、近江の多賀大社の観音院の順光房という、諸国の大名や臣下の武士たちに「お札」を配り歩いていいる人物が、下男に病氣になり困っていると聞いて、秀吉を下男として世話した。秀吉は行く先々で非常によく気がついて利発にふるまうので、順光房もよい下僕に巡り合えたと思った。

やがて遠州浜松に着いて、松下加兵衛之綱という人物に仕えることになった。加兵衛は、今川義元の旗本で、今川家の武道の師でもあり、近隣に名の通った人物である。順光房と秀吉はこの家を宿として借りた。加兵衛は、順光房の下僕の秀吉が、猿のようだが瞳が二つあることに気づいて、話をしてみるとことは明瞭だし、声は大きいことなどが気に入る、順光房にかけ合って自分の下僕とした。

加兵衛の家には今川家中の武士たちが集まり、昼は、鎗、劍、弓、鉄炮などの稽古をし、夜は軍学や兵書の講義が行われた。秀吉は、暇があれば昼は槍や劍の練習をよく観察し、夜は襖を隔てて講義を聞き、武術や兵学の概要を身につけた。こうして加兵衛のところに落ち着き、一八歳の天文二二（一五五三）年に元服（成人と認められるための儀式）をして、中村藤吉郎高吉と名を改めて、怠けることなく加兵衛に仕えた。

そのうちに加兵衛のところへ通っていた川島宇一という劍術自慢の男が、いつも秀吉が稽古場を見学している藤吉郎（秀吉）を見て、未熟者の分際でとなじった。秀吉は謝ったが宇一は許さず、師匠の加兵衛の家の下僕なら少しは劍の心得があるだろうと、試合をせよとせまった。秀吉は固辞して、試合をすれば自分が勝つにちがいないからと、逃げ出そうとした。そのことばに激怒した宇一は、お前の大言は武士の面目を汚すものだ、見逃すわけにはいかないと木刀を構えた。

宇一が上段から振り下ろすのを、右に左に秀吉はかわし、宇一の左目の上を木刀で打った。宇一が目がくらんだすきに、秀吉は宇一の木刀を打ち落とした。宇一はすぐすごと帰るほかなかった。このことを聞いた加兵衛

は、秀吉を門人の列に加え、武術と兵書の奥義を教えた。
一五五七（弘治三）年の春、小田原の北条氏政父子の大軍が駿河に侵入した。加兵衛は駿河の今川義元の旗本だったので、富士川でのこの合戦に参加した。秀吉は自分も参加したいと加兵衛に願ひ出たが、許されなかった。秀吉は家において加兵衛の生死もわからないようではいやだと、人に借りた鎧に身を固め、ひそかに合戦の見物をした。内心では、きょうこそは自分の初陣なので、高名な武將の首を取りたいと決心していた。そこに北条の先鋒の伊藤日向守が馬に乗りひとり、北条方が退却していくのを見にやって来た。

秀吉は必死で駆けより、馬の腹を突いて伊藤日向守を落馬させ、鎧の隙間から首を打ち取った。その首を加兵衛に届けたところ、加兵衛は秀吉の手柄に驚き、大將の義元へ披露すると、義元からは秀吉に直接にお褒めのことばがあった。北条は初戦の敗北を回復しようと、ふたたび大軍で押し寄せたものの勝利できず、武田信玄の和睦の仲介にに応じて、義元と和睦した。

加兵衛は秀吉が他家へ仕えるのではないかと恐れ、家臣の娘を嫁を世話した。この嫁は美人で、秀吉の容姿が醜いのを嫌っていたが、主家の命令なので断れなかった。

加兵衛は秀吉に黄金六両を渡して、これで織田信長が使っている胴丸という鎧を買ってくるように命じた。秀吉の妻はこの機会に秀吉と別れようと思い、離別状を書いてくれるように頼んだ。秀吉は承知し、先年、秋葉権現（火災除けの信仰で有名で駿河の秋葉寺にはじまるという）で拾った大黒天の像を、弘法大師製作の像なので、後に栄えるように祈れ、といって妻に渡した。

妻は自分は女の身で、立身出世には無縁だから、あなたこそ大切にし信心すべきだといって、受け取らなかった。秀吉は、それではこの像は用がすんだといって、傍の石に打ちつけて壊したところ、破片は灰のように細かく砕けて飛び散った。これは秀吉が天下を握るようになる祥瑞だったのだと、後になって思いあわされた。

尾張へ向かった秀吉は、矢矧橋のふもととの茶店で一休みした。たくさんの旅人が休んでいたが、その中に修行者が一人いて、つくづく秀吉の顔を見て、「お前の人相は天下の主人になる相だ。しかし、お前の姿かたちは賤しい匹夫下郎にすぎず、今は浅井、朝倉、今川、佐々木、斎藤、北条、武田、上杉など戦国の勇將が、天下を握ろうとしている、こんな時代にお前のような匹夫に天下の主になる人相があるのは不思議なことだ。自分は和

漢のさまざまな本を読んで人相を観ること学びとったつもりだったが、自分の観相の知識にはじめて疑いを持った」と秀吉に告げた。

秀吉は、今はこんなにも賤しい身なりだが、今後どのような幸いに出会いかもしれない。今のお前の人相の見立てに、後に応じていくかもしれない。そうだった時にはお前にたくさんのお褒美^{ほうび}を与えようと告げて修行者と別れた。この修行者こそ、秀吉が天下を統一した時に、一〇万石をあたえられた安国寺恵瓊^{あんこくじ けいけい}和尚であり、天下の祈願所となったのは、この観相のためであった。

ここまで紹介した『絵本太閤記』の物語は、『甫庵太閤記』や『素生記』など江戸初期の物語類にはない独特のものに思えるし、一番まとまっている。しかし、『絵本太閤記』の最終成立は享和二年（一八〇二）であり、秀吉の死後二百年が経過しており、決してそれは史実に基づく伝記ではない。もはや小説に類するといっても過言ではない。

まとめにかえて

以上、秀吉の誕生と信長に仕えるまでの幼少期につい

て、追検証してみた。結局は確実な史料は何一つないことが再確認できたにとどまる。

日本史では、太閤検地により農民の単婚小家族での農業経営権が確立したとする。それでもなお、単婚小家族での農業経営は、あくまで「検地帳の帳面づら」だけのことで、実態は地域差が激しいとも教える。

鎌倉時代の中期、一三世紀後半から次第に大家族の結合が弱まり、その代わりに地域的な結合を求めるために「惣」とか「惣村」とかが次第に成立していく。惣や惣村の代表者が地域結合の見せかけを守りつつ、実質的には惣や惣村の支配者となり、それが武力を備えて自立すると地侍になる。

地侍はもともとが惣・惣村から誕生・成長するので、潜在的には惣や惣村の中から別に成長する地侍に取って代わられうる。つまり、惣や惣村の中では対流現象のように成長と没落があり、それを突きぬけて生長しえたものが、守護勢力と結合して国人となる。国人は国人同士で結合と対立を繰り返し、浮沈を繰り返す。

守護権力は国人を飛び越えて、惣や惣村を自己の直接の支配下に置こうとする。こうした直接農村支配をめざす守護が戦国大名になる。直接支配下に置くことはそう

簡単なことではないので、自己の支配下に置いたはずの国人たちに裏切られて、没落する守護が大半を占める。国人ないし守護の家臣の中から国人化したものたちが、直接農村支配を目指し、大名化するケースが一般的な戦国大名へのルートになる。

惣・惣村の内部と外部で起きるこうした激しい変動は、その者の前身が何者であったかというような興味を失わせる。何者であれ、成功した者が「権力者」であり、「支配者」として認められる。

そうした時期が約百年続いたのが戦国時代で、「氏」・「素生」よりも現在の支配力が重要な時代が、一〇年一世代として一〇世代も続いた。如何ような名乗りもその場限りのことであり、場所を変えれば、それはもはや何の意味も持たないことが「常識」となった。

このような時代だったからこそ、秀吉のような「あやしの子」が支配の頂点に立つことができたのである。秀吉の伝記に出生や幼少期のことが不正確なのは、そのようなことへの関心がまだまだ生れてこないような時期だったためといえよう。

秀吉に限らず、この時期の伝記は「物語」であって、史実の記録書ではない。信長の伝記の太田牛一の『信長

公記』は、信長の「永禄三（一六五〇）年」の「桶狭間合戦」でさえ、「天文二（一五五二）年」と間違えて記述していることは有名である。一事が万事というわけではないが、近世の伝記類はよほどの検討を加えない限り、やはり「物語」でしかないのである。